

講師田中喜作と助教青山新が同じく所員（経理部勤務）に任ぜられた。翌六年十一月、正木が帝国美術院長に就任すると同時に主事は矢代へと替った。

⑬ 美校回想——ドモ又の死——

山崎坤象

〔本篇は平成五年四月八日、山崎坤象氏（昭和五年西洋画科卒業、平成五年八月歿）宅において録音した談話と、氏が他界される寸前に執筆された回想記とに基づいて作成したものである。〕

私は明治四十年に彫刻家山崎朝雲の長男として駒込林町に生まれた。近所には東京美術学校の金沢庸治・長原孝太郎先生の家があり、よく行き来していたが、特に長原先生の息子の坦さんとは京北中学で同級だったので、仲良しだった。父のもとには大勢の弟子がいたが、父は私が彫刻家になるのは反対で、そのためもあって私は絵の方へ進むことにし、中学四年のとき本郷洋画研究所に入り、岡田三郎助先生の指導をうけて、大正十四年三月に美校に入学した。

当時の西洋画科では初めの二年間は長原先生・小林万吾先生の指導のもとに皆一様に学んで、三年目から岡田教室・藤島教室・和田教室のどれかを選ぶことになっていた。私は勿論岡田教室だった。各教室はそれぞれ先生の作風や性格を反映して特色があったが、生徒の人氣から言えば第一藤島教室、第二岡田教室、第三和田教室の順であった。岡田教室の同級生は小見辰男・小野佐世男・新来哲・松平四郎・三井滋雄・渡辺力および許達その他外国人留学生で、先

生はどの教室の場合も一応週二回見回って指導するきまりになっていた。

実技の外では先ず父と懇意だった大村西崖〔朝雲が高村光雲に入門する際、仲介の労をとった。——編者註〕先生の東洋美術史、矢代幸雄先生の西洋美術史、久米桂一郎先生の美術解剖、合田清先生のフランス語、そして教練があった。教練は中学時代のそれとはまさに雲泥の差で、実に楽なものだった。斎藤幸晴先生は生徒に優しくかったので人氣があったし、また、名前は思いつけないが配属将校も立派な人だったから、生徒に尊敬されていた。私らの後の時代になって急に厳しくなったと聞いている。

美校時代を振り返れば次々と思えば出は尽きないが、一番愉快な思い出と言えはクラス仲間「ドモ又の死」の劇をやったことだ。そもそも私の父は無類の映画好きで、よく私を連れて浅草のキネマクラブへ通ったので、私も幼い頃から自然と映画や演劇に親しむようになった。美校時代には仲間と本郷座の新劇をよく見に行った。一年ばかり小山内薫の万来舎に通ったりしているうちに滝沢修・千田是也・伊藤薫朔らとも親しくなった。父に内緒で蒲田通いを始めたのは昭和三年のことで、一度だけだが美術監督もやった。それは豊田監督の「いつわりの唇」制作のときで、要するに舞台装置の仕事をしたわけだが、アトリエ内の場面の装置を作るので美校の仲間に頼んで教室から石膏像を借りることにした。夜、それを撮映所のトラックに載せてこっそり運び出したまではよかったが、その一つが壊れてしまい、とても困ってしまった。この仕事の月給は三十円で、初月給を母に見せると、こういうお金は直ぐ使ってしまうなぞ

いと言われたものだ。

美校にも校友会の演劇部や映画部があり、斎藤佳三・秋田雨雀・小山内薫らの講演会などが開かれた。昭和二年の秋には牛原虚彦と佐野碩の講演があったが、牛原を蒲田撮影所から引っ張って来たのは私だ。西田正秋が映画部にいて、大河内伝次郎の丹下左全なんかを持って来て映画鑑賞をやったりしたが、私らはそんなのは馬鹿にしていた。学校の帰りに須山計一君らと演劇論をやりながら山を降り、都電で銀座へ行って喫茶店で苦いコーヒーを飲んだものだ。築地小劇場の直ぐ傍にカフェ・ランブなる芸術家気取りの喫茶店が出来て、ベレー帽を被りルパンシカを着た変人奇人の芸術家連中が集まった。この店を開いたのは光風会の洋画家にして所謂おしゃれ文化人の沼田一郎君で、丸山定夫・清水将夫・滝沢修・木村太郎君らは常連だった。

さて、丁度その頃、私のクラスには私の外にも新劇ファンが多くいて、一つみんなで劇をやるうじやないかという話になった。音頭とりは須山君で、有島武郎の「ドモ又の死」と決まった。この劇は新劇座が大正十一年に報知講堂で上演したことがある。私たちがやったのは確か昭和四年の秋ではなかったかと思う。演出は須山計一、配役はドモ又が松岡信治、画家の中の「若様」が私、松尾隆成・新居武男・中村茂雄・進来哲・白沢禎・清水啓三・小松益喜・上月順・小見辰男・小黒武雄・小野佐世男・岩崎勝平・岩清水義見・周讓吉・矢橋六郎らが画家の役で、本物のヌードモデルも登場した。会場は美校の倶楽部。五十畳敷くらいの座敷が観客席、奥の襖を取り外した十二畳ばかりの所が舞台となった。当日、座敷は超

満員で、柱にもたれて立って見ている者も大勢いた。観客は美校生だけでなく、他の学校の演劇部の連中や、鈴川信一先生ご一家、斉藤幸晴その他の先生方、そして私服だがいかにもその筋の人らしい婆もちらほら。

開演三分前頃、カーテンの後ろで二人が担いだ大きな銅羅を、綿で巻いた撥でぐるぐると軽くさするようにする。その何とも淋しいような、ぞくぞくするようなドロドロとした低音の響きに併せて、幕を右から左へ巻き込み、その気持のいい音とともにパッとトップライトがステージ一ぱいに広がり、開幕となるが、その前から極めて低い唸るような歌声が響き渡る。有名な牢屋の唄である。

「牢屋は暗い。いつでも暗い……」

「いつでも鬼めの目が光る……」

いつでも光る……

劇は響きとセリフが混乱して役者全員殆どが脚本朗読調だったが、開幕前から各自相当柔らかい感覚でしゃべるように気を付けていたし、肝心な所はちゃんとやったから好調に進行し、万雷の大拍手を頂戴した。「コンゾー！」「ヤマザキヤー！」などと声がかかったりしたときは嬉しかった。しかし、劇はこの日に一遍やったきりで、みな厭になって、あとはやらなかった。

同じ頃、岡田秀雄・木下幹一・木村郁太郎らが中心となって校友会文芸部から『美術研究』という雑誌を発行していた。彼らは秀才で、制作より理論に熱心だった。木下はプロレタリア美術の後援者佐野碩の甥である「須山計一氏の話では関東庁長官をやった人の息子で名流の出ということであった。——編者註」。私も頼まれて小野

佐世男と一緒に寄稿したことがあるが、この雑誌は左翼的傾向が強かったので、当局に睨まれ、短期間で廃刊となった。そのときの事情は詳しくは知らないが、後で聞いたところによると学校から圧力がかかって発行できなくなり、岡田と木下が後始末をしたらしい。

そんなこともあったが、我々の時分の美校は自由な空気に包まれていて毎日が愉快だった。ハッチャン〔サトウハチロー〕が美校へ来ていたのもその頃で、番頭格の後藤俊春その他数名の取り巻きがいて、美校生がみな普通の服を着ているのに彼らは美の字の入った金ピカのボタンを付けた詰め襟の学生服を着て白いカラーをちゃんと付けていた。それが彫刻科の陽の当たるところにたむろしていて、通る生徒に声を掛けたりしている。ハッチャンは私を捕えて、「おい、お前、おとつあんが偉いからって威張るなよ」とか何とか言うのだ。今でも可笑しくて仕方がないのは、ある晩、ハッチャンや小野佐世男・後藤俊春、私を含む七、八人が向島の有名な待合で遊んだあと、さて勘定の段になってみな金がない。ハッチャンなんかもとより金など持っていない。そこでゴッチャン〔後藤俊春〕を人質に残してみな帰ってしまった。二日ばかりたち、思い出して行ってみると、ゴッチャンはあの鼻の下に髭を生やした長い顔で泣き出した。こらしめのために布団部屋をあてがわれ、雑巾がけをさせられていたのだった。

私のクラスには三井の御曹司あり、松平子爵の息子あり、左翼学生たちあり、デカダン派あり、支那、朝鮮人留学生たちありで、実に多彩だった。「ドモ又の死」を一緒にやった松平四郎君は後に一歩兵卒として勇壮に戦い、猛烈な戦死を遂げた。私は詩曲部隊（西

條八十・飯田信夫・古関祐司・深井史郎・佐伯孝夫・服部良一・鈴木聡）の一員として上海附近を行進する途中、このことを聞いて涙が流れた。クラスの留学生たちは大体が金持ちで、あの劇をやったとき飲みものなどを差し入れたのは台湾人生徒たちだった。支那人の許達には、やはり詩曲部隊に加わって上海へ行ったとき、ガーデンブリッジのそばでバツタリ出会ったことがある。こちらの馬車が向うから来た馬車とすれ違ったとき、「コンちゃん」と呼びかけられた。驚いてよく見るとそれは真っ白い詰め襟のような支那の高官が着る服を着た彼だった。大喜びでかじりついてきて、直ぐに自宅へ連れて行ってもてなしてくれ、また、上海滞在中は色々と便宜を図ってくれた。しかし、美校時代の友人たちも今は殆ど世を去った。

⑭ 靖国神社の釣灯籠の製作

昭和五年三月十日、陸軍記念日二十五年記念として、天皇陛下から靖国神社に釣灯籠一对を下賜されることとなり、宮内省より本校に製作が依頼された。藤田勝重著「御下賜、御寄進の拝殿内釣灯籠について」〔やすくに〕昭和四十九年一月一日発行）によれば、約六カ月の間、製作にあたり、翌年三月十日に点灯された。左記は製作主任清水南山の製作談である。

本號巻頭所掲〔写真は略す〕の釣燈籠は、昭和五年三月十日陸軍二十五年記念祭に際し、畏くも 天皇陛下より靖國神社へ御燈籠御寄贈仰出され、宮内省より其製作に關し東京美術學校へ依頼